

姉妹都市アウクスブルクとの交流をつなぐ

副団長 玉木 博恵

はじめに

今回、尼崎市青年使節団の副団長としてアウクスブルク市への訪問に参加させていただきました。建築職という職種上、国際交流という分野とは縁がないと思っておりましたので、お話をいただいた時は大変驚きました。無事に団員達を引率できるだろうか、現地での職責を果たせるだろうか、言葉の壁はどうしようかと不安は尽きませんでした。現在、市の景観形成に関わる仕事を担当していることもあり、ドイツで2番目に古く約2,000年もの歴史を持つアウクスブルクのまちを訪れるということは、私自身の見識を深めるためにも大変良い経験になるという気持ちが上回り、来年には60周年を迎えるという姉妹都市交流のバトンをつなぐ機会を引き受けさせていただくことにしました。

いざ、アウクスブルク市へ

台風21号の影響により、予定していた関西国際空港の利用が困難となり、訪問直前でフライトや日程が変更になるなど、スムーズな旅立ちという状況ではありませんでしたが、ミュンヘン空港に降り立ち、アウクスブルク市職員や通訳の方々の温かいお迎えを受けた瞬間、長時間のフライトによる疲れも一気に吹き飛ぶと同時に、使節団としての一日が始まったのだと身の引き締まる思いがしました。

到着の余韻に浸る間もなく、表敬訪問を市庁舎「侯爵の間」で行いました。両市の友好関係に関わる方々に囲まれた和やかな雰囲気の中、グリーブル市長から、歓迎のご挨拶と共に台風被害に際してお見舞い

の言葉もいただきました。



市庁舎とペルラッハ塔

隣室の「黄金の間」に足を踏み入ると、あまりの豪華さに感嘆の声が漏れ聞こえて



黄金の間

きました。建都2000年を機に修復されたこの部屋の天井高さは約14mもあり、大理石の床と黄金に輝く天井、天窓から差し込む光で荘厳な雰囲気でした。

ホストファミリーとの対面～ホームステイ

訪問前から団員達のホストファミリーは決定しており、メールやSNSで事前に連絡を取り合っていましたが、いざ対面式となると緊張感に包まれ、一人ひとりの名前が呼ばれ、ホストファミリーと挨拶を交わした瞬間、表情が和らぎ互いに笑みがこぼれていました。

滞在中、団員達は視察等の使節団としての団体行動以外はホストファミリーと過ごします。初日は少し不安気だった彼らに翌

朝様子を聞くと、「これからの滞在が楽しみです。」「ホストファミリーに大変良くしてもらっている。」との声が返ってきました。また、終盤にはホストファミリーと1日自由に過ごす日があるのですが、近郊都市観光やピクニックに連れて行ってもらった人、親戚の結婚式に参列させてもらった人など、現地でしか味わえない大変貴重な経験が出来たようです。

両市の青年使節団交流は、交互に受入れを行っており、来年度は尼崎市にアウクスブルク青年使節団を受け入れることになります。団員達には、派遣後もホストファミリーとしての受け入れや国際交流事業への協力をお願いしています。最初は義務的に感じていた彼らですが、帰りのフライトでは、「こんなに良くしていただいたので、今度はホストファミリーとして受け入れをしたい。」「この経験をぜひ兄弟にも勧めたい。」「留学やホームステイという選択肢のハードルが低くなった。」などと話してくれました。彼らの気持ちが動くということは、それだけ彼らが受けた刺激が強かったということなのでしょう。これには、ホストファミリーの存在が欠かせないと思います。このような心の交流があったからこそ、次に繋がりたいという思いにつながったのだと感じました。



見送りに来てくださったホストファミリーと

アウクスブルク市職員との交流

団員達が市内を案内してもらっている時間を利用して、都市計画に携わるアウクスブルク市職員の方と意見交換を行うことができました。街並みをどのように維持されているのか、どのような課題を抱えているのか等のお話を伺いました。



旧市街地の街並み



早朝、石畳の路面清掃を行う清掃車

市庁舎もある旧市街は、石畳の道に壁面や高さが揃った建物が並んでいます。(本市北部にあるショッピングセンターの外観がこの街並みをモチーフにしていることを恥ずかしながら今回の参加で知りました…。) ドイツは地質上、地震がほとんどないことから(数十年に一度、震度1程度の地震があるかないか)、たくさんの古い建物が残っています。特に旧市街は景観上重要で保全すべきエリアとして規制が厳しく、許可がないと改修等の工事は出来ず、建物を解体する許可の方は更に難しいそうです。一方で、外観を守り続けることが重要視されており、内部改修は可能です。住む人にもメ

リットがあるように税制優遇や助成制度も整っているようです。

また、現在 30 年後のまちのあり方について計画するプロジェクトが進行中だそうです。ミュンヘン郊外として利便性が高いことや移民が多いことから人口増の傾向にあるアウクスブルク市は約 10 年ほどで市街地が飽和状態になる可能性があるそうですが、“今ある緑地を減らさない”ことを前提に、既成市街地を活用する方策を検討しているとのことでした。

今回、4 年前に 3 年かけて木工職人が製作されたという市域の立体模型を見せていただきました。市庁舎や大聖堂、ウルリッヒ教会以外に高い建物がほとんどないことが一目瞭然で、新しい建築計画がボリューム的にも街に調和するのかを確認できるものでした。

とは言え、時代の流れやニーズの変化に伴い、市がコントロールできないケースもあるとのこと、私が日々の業務で感じている課題や悩みを打ち明けると「我々も同じだよ。」と笑っておられました。



木工職人さんが作られた立体模型

現地イベントへの参加

自転車先進国としても有名なドイツ。歩道上に整然と並ぶレンタサイクルが旧市街地の景観にも馴染んでいました。日本のレンタサイクルと言えば、(あくまで個人的な

感想ですが) 前カゴに“レンタサイクル”と書かれていて、自転車の色合いも赤等の目立つ色が多いというイメージがあったので、国による違いに気付かされました。



街中にあるレンタサイクル

そのようななか、土曜日の夕方、市職員の方から「今日、自転車のイベントがあるんだけど、参加してみる？」というお話があり、どのようなイベントなのか詳細も分からないまま、急きょ、団長と一緒に参加することにしました。



同じくアウクスブルク市と姉妹都市である

長浜市の団長・副団長と一緒に

それは、第 3 回 Augsburg Radlnacht というアウクスブル市主催の自転車イベントで、「1 日くらい市内から車を追い出そう！」という趣旨なのとか。

スタートは 21 時とかなり遅めの時間設定で、市内 15km のコースを走ります。スタート時点には、軽食などのブースやミニステージが設けられ、生演奏が会場の雰囲気

を盛り上げます。19 時頃から続々と人々が集まり始めました。夜のイベントにもかかわらず、家族連れが結構多いという印象を受けました。折り返しポイントではバンドの生演奏があったり、家の窓から応援をしてくれる人や観覧しながらベランダでくつろぐ人の姿が見られたりと、市民みんながこのイベントを受け入れ、楽しんでいるように感じました。私たちも、昼間とは一味違う夜の街並みを、借りたマウンテンバイクでとても気持ちよく走り抜けることができました。翌日の報道によると、なんと 5,000 人以上の方が参加されたということでした。

尼崎市青年使節団の団員達

今回の使節団団員は、社会人 1 名、大学生 7 名の合計 8 名で、留学経験のある団員もいれば、海外に行くのが初めての団員もありました。全員、語学が堪能で、ホームステイに対する若干の不安はあるものの、それ以外は楽しみしかないという頼もしいメンバーでした。最初は、団員達があまりに大人しく、どのような団になるのか少し心配ではありましたが、訪問に向けて行った 10 回の事前研修を通して、徐々に打ち解けていきました。研修では、自分たちの生まれ育ったまちがどのような歴史を持っているのかや尼崎市の現状などについても学びました。

また、滞在中にお世話になった方々が一堂に会すフェアウェルパーティが開かれるのですが、彼らには、この日の出し物として「尼崎市の PR 映像を作成し、発表すること」というミッションが与えられていました。社会人や学生として多忙な日々を送っている彼らでしたが、構成、取材・撮影、編集など役割分断を決め、全ての工程を自

分たちでやり遂げました。現地でも滞在先のホストファミリーとの写真を追加するなど、直前まで編集作業を行った力作は、みなさんに喜んでいただきました。



会場の拍手を受け、満面の笑みの団員達

訪問を振り返って

無事に全行程を終えることが出来て、関係者のみなさまには感謝の気持ちで一杯です。滞在中は、楽しんでいるか、困っていることはないか、疲れてはいないか、食事は口に合っているかなど、何度も声をかけてくださり、携わってくださる人々の温かいお心遣いが随所に溢れていました。また、長い歴史の中で積み重ねてきた交流活動による効果は、単なる個人の知識や経験に留まるのではなく、得た経験や感動を様々な立場や場面で次の人につなぎ分かち合うことで、より長く持続しているように感じました。訪問を通して得たものを、私も微力ながら、次につないでいきたいと思います。